安寧の都市ユニットの歩み

谷口栄一　安寧の都市ユニット ユニット長／京都大学大学院工学研究科 教授

安寧の都市ユニットは、京都大学大学院工学研究科と医学研究科が共同で運営する研究・教育ユニットとして平成22年(2010)4月1日に発足し、平成27年3月31日に5年間の活動を終了することになっている。発足前の準備期間の3年間を含め、この8年間のユニットの歩みを振り返ってみたい。

「安心・安全で健康的な生活」をテーマに新しい医工連携のかたちを模索

安心・安全な都市を創るということは土木工学の中心の課題の1つであり、平常時・災害時を問わず人々が安全な環境で安心して暮らすことができる都市を計画・整備し、マネジメントを行うことは重要な問題である。そのような意識をもって京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻、都市社会工学専攻では、安心・安全な都市を創るための課題について研究・教育を行うユニットを構想し、平成19年度に予算要求を行った。

その際に医学研究科からも、「人々が健康的に生活できるような社会を創る」というテーマで研究・教育ユニットの予算要求が行われていた。この両方の構想をまとめて1つの医工連携ユニットとすればよいのではないかということになり、医学研究科の笹田昌孝教授や野本愼一教授との話し合いの結果、医学研究科と工学研究科が合同で予算要求を行うことになった。

従来の医工連携は、病気を治すために、診断や治療のための機械、器具、薬品などを共同で開発することに主眼が置かれていたが、今回は、人間が心身ともに健康に生活し、活動するためには、どのような環境、制度、システムの都市を構築すればよいのかを研究し、教育するという、まったく新しい観点の医工連携をめざすことになった。

このような医工連携はユニークであり、ほかに例がないので、医学研究

科および工学研究科の先生方に参加いただいてワークショップを何度も開催し、医学・人間健康科学の観点および都市系工学・都市マネジメントの観点から、どのようにすれば安心・安全で健康的な生活ができる都市を創ることができるかについて議論を行った。

その中で、都市計画において従来は明示的にあまり考慮されてこなかった「人間の健康や心理的な安心感」を考慮することの重要性が認識されるようになった。また、病気を予防できるような都市の構造やシステムを考えるとともに、病気になった場合においても、在宅治療において地域全体で支援するような都市のあり方について考える必要があるという認識をもつようになった。人口減少や超高齢社会を迎えて、このような課題はこれからの都市政策の立案、実施においてとても重要な課題であることがわかった。そのような共通認識のもとに、何度も文部科学省、文化庁などに予算要求、説明に通い、3回目の挑戦でようやく、平成22年度予算として安寧の都市ユニットの設置が認められることとなった。

フィールド重視の臨地教育と創造型デザイン教育で「安寧の都市クリエーター」を育てる

なお、ユニットの名称については、安心・安全で健康的な生活ができるという意味を表す「安寧の都市ユニット」とすることとした。安寧という言葉は古い言葉であり、旧都市計画法（大正8年制定、昭和43年廃止）の第1条において、「本法において都市計画と称するは交通、衛生、保安、防空、経済等に関し永久に公共の安寧を維持し又は福利を増進するための重要施設の計画・・・」とあるように、公共の安寧は都市計画の主要な目標であると考えられてきた。安寧の都市ユニットの安寧は、公共の安寧という場合とは少し意味が異なっており、3世代の人々が安心・安全に健康的に生き生きと生活できるという意味を含んでいる。すなわち、都市の住民をマス（mass）として捉えるのではなく、自立した個人が安心・安全と感じ、健康的に生活でき、3世代が生き生きと活動できることを目指している。

このユニットの準備に当たってきた京都大学大学院医学研究科、工学研究科の教員8名のほかに、特定教員6名および研究員3名を新たに加えて、平成22年に安寧の都市ユニットが発足した。このユニットの目標として、健康医学と都市系工学とを融合した「人間健康都市科学の創生」と「人・社

会・環境の安寧による安寧の都市の実現」の2つを掲げた。

ユニットにはクライシスマネジメント部門とアーバンアメニティ部門の2部門を設置した。クライシスマネジメント部門においては、地域社会の防災ポテンシャルを向上させ、安心・安全な社会を構築するための自然・人為災害リスクマネジメント、災害医療体制整備のための支援技術などの教育・研究を行う。いっぽう、アーバンアメニティ部門においては、健康と都市アメニティの創出を目的としたインフラ整備や交通計画・ロジスティクス、健康都市計画、環境・景観計画などの教育・研究を行うこととした。

このユニットの目的は、多様な地域主体と共に実践的に解決すべき課題を理解し、総合的な判断と適切な対処方策を実践的に提案実行できる人材「安寧の都市クリエーター」を地域レベルで育成することである。教育の特徴としては、フィールド重視の臨地教育と創造型デザイン教育があげられる。

幅広い講義テーマと活発な議論をとおして実践プロジェクトを練りあげる

カリキュラムとして、毎週水曜日に、共通基礎科目、基礎科目・実習科目、共通発展科目の講義を行うとともに、毎月の第1土曜日に外部の講師による「安寧の都市セミナー」を実施した。講義としては、都市健康科学基礎論I・II、安寧の都市政策、災害健康危機管理論、対話・安寧の都市論、健康都市政策論、対話・安寧の都市デザイン、感性都市空間論などがあり、人間健康科学および都市系工学の専門の教員が分担して講義した。

安寧の都市セミナーでは、外部の講師が都市論、国土論、コミュニティ論、交通・ロジスティクス、環境論、地域経済、減災と災害復興、高齢者の住環境、地域医療、地域再生、再生医療、中山間地域の居住、仏教など多岐にわたるテーマについて講演を実施し、活発に議論した。また、実践プロジェクトとして各履修生が実際のフィールドを対象として調査・研究を行い、安寧の都市のデザインやプロジェクトの提案を行った。

実践プロジェクトの結果は年度末に各履修生が成果論文としてまとめ、研究発表会において発表した。実践プロジェクトは、フィールドを対象として、たとえば市役所で都市計画を担当してきた人が医療、介護の問題を取り扱うこともあり、医療関係の仕事をしている人が公共交通の計画を研究することもあった。履修生同士がグループで議論をしながら、実践的な

都市デザイン、都市政策の研究を行うことができるのが大きな特徴である。さらに安寧の都市シンポジウムを公開で毎年1回開催し、ユニットの教員および外部の講師による講演を行い、安寧の都市について実践的な報告、新しいアイデア、これからの方向性などについて議論した。

このユニットには、地方公共団体、病院、消防署、保健所、民間企業などから多くの人が社会人履修生として参加した。平成22、23、24、25年度の社会人履修生の修了者数は、14人、10人、21人、18人であり、合計63人となる。また、これ以外に、京都大学大学院工学研究科、医学研究科の大学院生が講義を履修している。社会人履修生は大きく3つに分けることができる。土木建築などの工学系の背景をもち、役所において都市計画や交通計画、街づくりに関係している人、医学、看護学、保健学などの背景をもち、医療関係の職業についている人、およびその他の情報、交通、電力、建設などの民間企業で働いている人などである。これらの異業種の人たちが同じユニットで学び、議論することは大きな刺激になり、お互いの交流ネットワークも重要なものとなる。安寧の都市ユニットでは「安寧会」という履修生や修了生の親睦のための組織をつくり、交流を深めている。

ユニットを巣立ったクリエーターたちが「安寧の都市」の創造にむけて力を発揮しつつある

平成23年(2011)3月11日に東日本大震災が発生し、安寧の都市ユニットの多くの教員、履修生が震災後の救援や復興について調査、研究、提言を行った。実際に被災地の行政や医療の支援にあたったケースもあった。安寧の都市ユニットの発足当時には、東日本大震災のような巨大災害を想定していなかったが、実際にこのようなカタストロフィックな災害を目の当たりにして、多くの人が新たなパラダイムの変化を感じ取り、研究の範囲、方法論、連携について軌道修正を余儀なくされたのではないかと思われる。

特にこのような複合的な巨大災害の防災、減災を考えるとき、医工連携だけでは不十分であり、社会学、経済学、心理学、情報学など多方面の学問を駆使したアプローチが必要であることを痛感させられた。さらには、今後発生が予想される首都直下型地震や南海トラフを震源とする巨大地震への備えについて考えるとき、産官学のそれぞれの関係者の公民パートナーシップが重要であり、それぞれの主体がもっている情報の共有が重要であ

ることを改めて強く感じた。

国際的な連携について、このユニットでは、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」の1つである「強靭な国づくりを担う国際人の育成事業」に協力している。平成24年度より毎年夏に京都大学においてDisaster and Health Risk Management for Liveable Cityの集中講義を英語で行い、ASEAN諸国などからの海外の学生および京都大学の日本人学生が約30名参加した。このプログラムはこうした学生を対象に、日本およびタイ（あるいはインドネシア）などの海外で、安寧の都市を創るための災害や健康リスクマネジメントについて幅広い観点から教育を行うものである。このほかにも、ユニットの教員による海外の事例研究、海外の研究者との共同研究も行っており、海外の優れた事例を研究するとともに、日本の優れた事例を海外に発信している。

安寧の都市ユニットの1年の課程を修了し、「安寧の都市クリエーター」として元の職場に戻った多くの履修生が、新たな視点から職場においてそれぞれの業務を遂行しつつ、人口減少、超高齢社会の日本の都市において、さまざまな問題解決に尽力している。彼らのそうした取り組みがやがて大きな成果となって、安寧の都市が創られることを願っている。